様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：４７７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2017
課題番号：２５７７０２１２

研究課題名（和文）文化的同化法による異文化コンピテンスの育成：国際語としての英語教育への応用と実証

研究課題名（英文）Fostering Japanese EFL students' intercultural competence via Culture Assimilator

研究代表者
石井　英里子（ISHII, Eriko）

鹿児島県立短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：８０５８０８７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究計画では、文化的同化法を応用した英語教育モデル（Ishii, 2009）の基礎的研究をさらに進め、異文化コンピテンス育成手法として教育現場への応用実践に展開するための基盤となる研究を行った。先行研究では文化的同化法を加算的に取り入れることで積極的な教育効果が得られていたが、英語教育において繰り返し使用することは実用的にあまり望ましくないことがわかった。そこで文化的同化法を含んだ様々な異文化教育の方法を取り入れたプログラムを開発した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate the effects of Cultural Assimilators (Fielder, Mitchell, & Triandis, 1971) on English learning outcomes and Japanese EFL learners' cross-cultural attitudes. This study suggests that multiple Culture Assimilators should not be implemented into EFL classrooms because they have some possibilities to demotivate students to practice English, therefore, the present study developed an intercultural English program with various intercultural education methods.

研究分野：教育学

キーワード：英語教育　異文化コンピテンス　Intercultural Competence　カルチャー・アシミレーター　文化的同化法　Culture Assimilator　異文化教育

１．研究開始当初の背景

国際語としての英語教育では，単なる英語（言語）の学習だけではなく，異文化コンピテンスを育成することも重要な学習目標の１つとされている。例えば，異文化に対する友好的な態度や文化を適切に解釈する能力などがある。日本の高等学校外国語科の目標について，学習指導要領（文部科学省，2011）では「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」と記されている。

このような異文化コンピテンスの解明はこれまで多くの研究によって行われて来たが，外国語教育における異文化コンピテンスの教育手法，すなわち，いかに授業内で学習者の異文化コンピテンスを育むかが，理論的にも実践的にも重要な課題となっている。研究代表者は、これまでの一連の研究「日本の学校教育における国際語としての英語教育と異文化教育の統合的実証研究」（科研費特別研究員奨励費）および「英語学習者の異文化に対する積極的な態度の育成-教育手法の開発とその教育効果の実証」（科研費若手（B））において，日本の高校生英語学習者を対象に，学習者の異文化コンピテンスを育成する手法を理論的，実践的に検討してきた。そして，異文化教育の一手法である文化的同化法を応用した英語教育モデルを開発し，異文化コンピテンス育成に関する研究を行ってきた。その際，特に異文化への積極的な態度に着目し，この文化的同化法を応用した教育モデルが，学習者の異文化への積極的な態度への変容を促すとともに，英語学習そのものの妨げにはならないということを明らかにした。

２．研究の目的

本研究の中心となる文化的同化法については，以下の３．研究の方法で説明する。

上述した背景およびこれまでの研究の成果をもとに，本研究はまだ解明されていない文化的同化法を応用した英語教育モデルの基礎的研究を完成し，異文化コンピテンス育成手法として日本の英語教育現場への応用に展開するための基盤となる研究を行うことを目的とした。

(1) 異文化コンピテンス育成の効果的な介入手続きと教授内容の開発と検証

Ishii(2009)のモデルは，スピーキングの授業を想定して開発し，その教育的効果を明らかにした。そこで，本研究計画では，他のスキル（リーディング，ライティング，リスニング，４技能統合など）を想定した授業モデルも検討し開発，実証していくこととした。また，学習法の異なる授業モデル（たとえばグループワークや個人学習など）による教育効果を実証的に検証し，効果的な介入手続きと教授内容を明らかにすることを目的とした。

(2) 異文化学習方略や一般的な対人コミュニケーション方略など他の学習者要因への影響の検討

Ishii(2009)では，文化的同化法を導入しない英語教育を経験する統制群を用いて，文化的同化法と英語教育を統合した場合の教育効果（他文化に対する積極的な態度への変容）が明らかになった。本研究計画では，さらに詳細に学習者要因を検討し，学習者の異文化学習方略や一般的な対人コミュニケーション方略，問題解決能力への影響など他に関連すると考えられる学習者要因を探索的に検討することにした。

(3) 開発したモデルの長期的介入による教育効果と教育現場への応用実践の可能性の検証

１と２で検討したモデルを教育現場に適用し，実際にカリキュラムならびに教材を開発する。そして，そのカリキュラムを実際に運用し，その教育効果を長期的に追跡し検討することとした。

以上のようにして文化的同化法を応用した英語教育モデルの英語学習と異文化学習の両方のプロセスを探求していくことを本研究の目的とした。

３．研究の方法

本研究では、文化的同化法を応用した異文化コンピテンス育成手法の基礎的研究から，これらの実証的研究に基づく教材・カリキュラム開発まで実際の教育現場への応用を展開した。

本研究計画の中心となる文化的同化法（Culture Assimilator, Fielder, Mitchell, & Triandis, 1971）は，異文化コミュニケーションの帰属理論に基づいており，文章の解釈を中心とした異文化認知学習法の１つである。文化的同化法は，次の３部構成になっている。

（１）ある２つの文化における習慣の違い・誤解・摩擦などの事例を具体的に描写した読み物

（２）その事例に対する質問，および，その答えとなる４つまたは５つの異なる解釈

（３）異なる解釈に対する解説

この文化的同化法の目的は，学習者がこの読み物の分析を通して，自分の文化とは異なる文化における文化的価値観，態度，信念などに触れ，目標学習文化の人々がある状況をどのように解釈するかを帰納的に学習することである。文化的同化法には，学習対象文化を特定した Culture-Specific Assimilator（例えば，日本文化を学ぶ目的とした Japanese Culture Assimilator）と，学習対象文化を特定しない Culture-General Assimilator の 2 種類があり，学習目的によって使い分けられる。申請者の一連の研究では，国際語としての英語教育という視点から，

自文化と異なる文化の人々との英語によるコミュニケーションを想定しているので，Culture-General Assimilator を英語教育へ応用している。本研究計画は，まだ解明されていない文化的同化法の教育効果をさらに詳細に検討し，異文化コンピテンス育成手法として教育現場への応用実践に展開するための基盤となる研究を行った。

本研究では主に以下の３つ研究を実施した。

１．文化的同化法を応用した異文化コンピテンスの育成を促す効果的な介入手続きの開発

２．文化的同化法を応用した異文化コンピテンスの育成を促す効果的な教授内容の開発

３．学校教育への適用と長期的介入による教育効果と教育現場への応用実践の可能性の探求

なお，研究方法は主に先行研究のように対照群を用いた実験調査を行う予定であったが，研究対象の変更のため，準実験計画に改めた。また長期的介入を行う予定であったが，研究代表者の所属機関変更等の理由で，長期的介入は次の研究へと見送った。また１と２に関しては、国内に限らず、国外の範囲まで、英語教育に限らず、ほかの外国語教育、そして従来の学習目的である異文化教育の目的で文化的同化法が使用されているものも含めて先行研究を検討した。

４．研究成果

以下では研究成果について、上述した研究方法でのべた３つの項目ごとに説明する。

１．文化的同化法を応用した異文化コンピテンスの育成を促す効果的な介入手続きの開発

文化的同化法に関する先行研究を収集し、レビュー研究を行い論文としてまとめた。文化的同化法は元々、個人学習用に開発された読書教材であるが、現在学校教育で求められている、「対話的な学び」や「主体的な学び」の環境を作る授業形式に対応するために、グループワークやペアワーク形式を採用し、インタラクティブな活動として介入手続きを開発し、研究代表者の授業で実際に試用しながら修正を加えた。

２．文化的同化法を応用した異文化コンピテンスの育成を促す効果的な教授内容の開発

まず、先行研究に基づき文化的同化法を用いた英語教育の教材を複数開発した。研究計画開始当初の研究計画では、いくつかの教材を連続的に使用することを想定していた。しかし、予備実験によって、同じ作業の繰り返しにより授業が単調になってしまい学習者のモチベーションが下がってしまうことが明らかになった。当初、繰り返すことが加算的に教育効果を上げると予測していた。しかし、今回の研究対象である大学生の英語の授業は、週１回開講する形態が多く、学習者のモチベーションの維持が重要である。したがって、予定していた加算的なプログラムではなく、文化的同化法だけでなく、他の異文化教育の方法を織り交ぜた 15 回分の教育プログラムを開発した。

３．学校教育への適用と長期的介入による教育効果と教育現場への応用実践の可能性の探求

最後に、教育効果の実証である。本研究計画は研究代表者の研究機関の移動ということもあり、若干当初の研究計画から遅れて進んだ。その為、開発したプログラムの教育効果の実証が予定よりも大幅に後ろ倒しになり、現在、15 週間にわたる長期的介入が進行中である。

なお本研究で明らかになったことは、本研究事業をもって完結することはなく、今後も様々な事例を通じて継続研究が必要である。英語教育の中に異文化教育的視点を取り入れながら、新学習指導要領で求められてい「対話的」「主体的」な学び促し、生徒や児童の異文化コンピテンスを育むための新たな手法を開発するだけにとどまらず、特に実証的エビデンスがまだ十分ではないとされるこの分野において、様々な手法に関する実証研究を積み上げる必要がある。

＜参考文献＞

ISHII, E. (2009) The effects of task-based intercultural instruction on the intercultural competence of Japanese secondary EFL learners, *Asian Journal of English Language Teaching*, 19, pp.159-181.

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

なし

〔学会発表〕（計 1 件）

① 多文化共生社会で求められるコミュニケーション力，単独，鹿児島哲学会，於鹿児島大学，2015 年 11 月 21 日

〔図書〕（計 2 件）

① 石井英里子(2015)「対応のある t 検定と分散分析」，田崎勝也（編）『コミュニケーション研究のデータ解析』，ナカニシヤ出版，pp．17-34.

② 石井英里子・仲野友子・申知元(2015)「適性処遇交互作用（ATI）」，田崎勝也（編）『コミュニケーション研究のデータ解析』，ナカニシヤ出版，pp．65-76.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし
６．研究組織
(1)研究代表者
石井英里子（ISHII, Eriko）
鹿児島県立短期大学・文学科・准教授
研究者番号：80580878

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
なし（　　）